

3. 英彦山水系流域と民俗芸能にみる歴史的風致

I. はじめに

農耕の予祝祭として行われる神幸祭は、天水分の山「英彦山」から始まり、水の流れとともに下流地域に広がるように、時期をずらしながら各集落で神幸祭が行われる。この神幸祭においては、各集落において大切に守られてきた神社でさまざまな民俗芸能が奉納されている。自然と共生する農耕信仰を今も感じ取ることができる。

天水分の山「英彦山」は、彦山川や今川の水源地であり、水源地から流れ出る水は沢となり、いくつもの沢が合流することで川となり、最終的に彦山川や今川として、英彦山の麓の集落に流れ出ている。彦山川の水源地の一つは、英彦山神宮奉幣殿の境内に祀られている天水分神にある。天水分神は、流水を疎通、分配することを司る神として祀られ、古くから人々に信仰されてきた。かつては、修験行者が入峰時に必ず水筒に入れ、峰中の保健飲用とお守りとして用いたとされ、近年は、不老長寿の御神水として頂く参詣者が多く、水源は岩の間から流れる「圓通の滝」より流れ出る霊水である。また、今川の水源地は、高住神社の獅子口にある。

これらの水源から流れ出てきた水は、彦山川として下流地域の落合や野田等の地域へ、今川として下流地域の津野へ流れ出でている。この水は水量が豊富であることから、古来より下流地域で営む農業用水として使われてきた。現在も英彦山の麓の集落においては、農業が営まれており、英彦山から流れ出ている水を使用することで、お米をはじめとしてさまざまな野菜や花卉等の豊かな作物が作られている。

これらの集落は、地形的に平地が少ないことから、谷筋に流れる河川周辺にある少ない平地を農地として使い、地形が急勾配となる山林との境界に民家が建ち並ぶ空間構造の集落が多い。また、農地は地形に合わせて作られているため、段々の形状となり、棚田が多く見られる。

集落にはさまざまな神社が立地しており、地域の守り神として、境内にある樹齢を重ねた樹木とともに地域の人々によって大切に守られてきている。これらの集落には、重要文化財に指定されている旧数山家住宅をはじめとして、往時の面影を残す茅葺屋根の住宅も残されている。これらの棚田と伝統家屋、神社、周囲の山林等が一体となることで、趣のある景観が現在も見られる。



圓通の滝からの御神水



高住神社の獅子口



農業景観（北坂本地区）

天水分の山「英彦山」は、豊かな自然を擁しており、豊かな水量を持つ彦山川や今川等の河川が麓に流れ出でている。これらの河川は、農耕を営む人々にとっての生命の源であり、

かつ水害を引き起こす脅威でもあった。こうした山に対する感謝の念と畏敬の念が山岳信仰を発生させ、文武天皇が雨乞いの勅願を発したこと等により「筑紫霊験所」として農耕における水分信仰の中心となった。

農耕の予祝祭として行われる神幸祭は、英彦山から始まり、水が低きに流れるように神幸祭も下流地域に広がっていく。この神幸祭は、水分信仰から英彦山神などに豊穰を祈る祭りとして行われ、山伏修験から影響を受けた神楽や獅子楽の民俗芸能が各所で奉納されてきた。今日も、本町の各集落で神楽や獅子楽が奉納されており、神楽は豊前地方^{ぶぜん}だけでも30箇所以上で奉納されている。

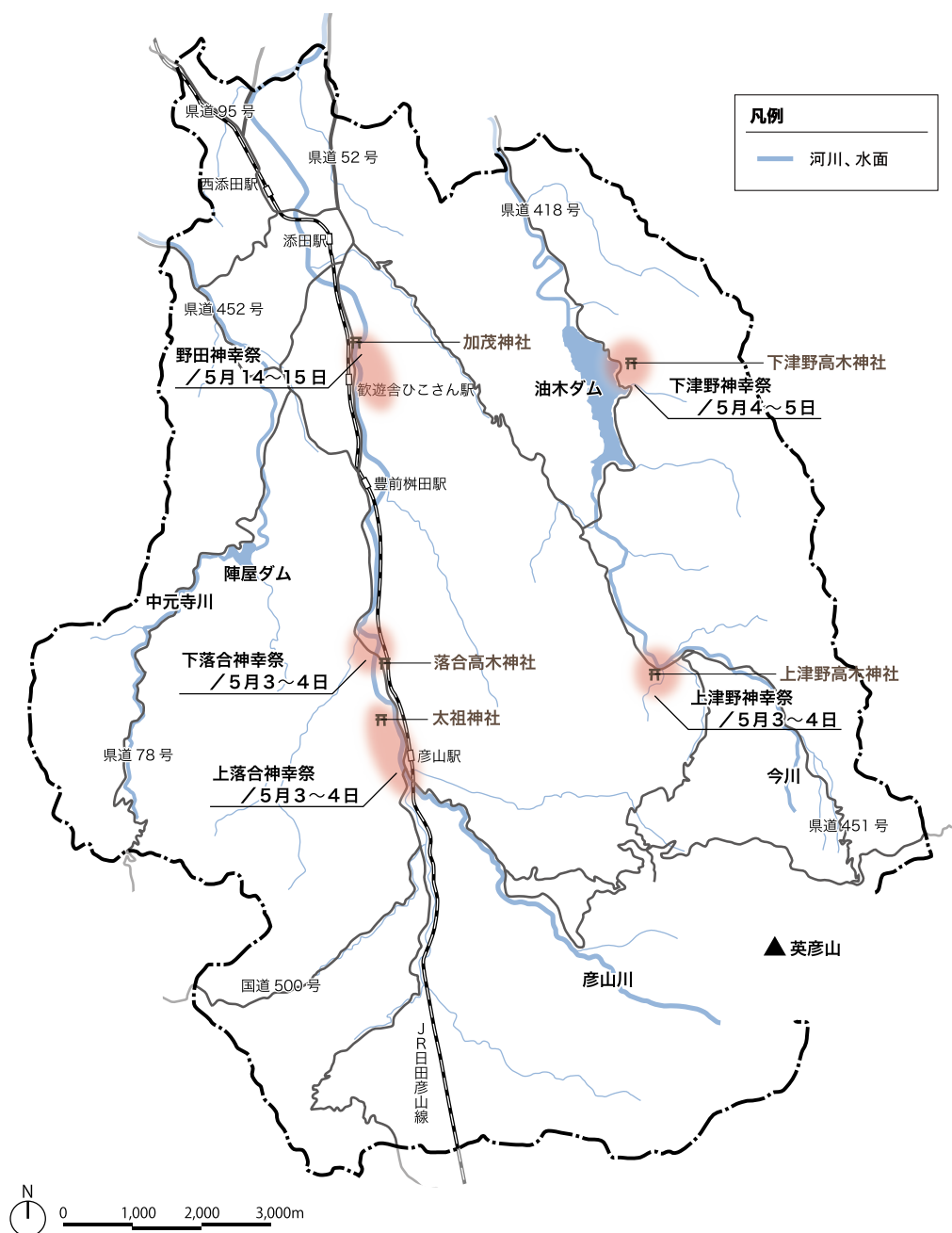


図 各集落で行われる神幸祭の神社と月日

* 月日は、平成25年(2013)の月日を記載

Ⅱ．歴史的風致

3－1．津野神楽^{つのかぐら}にみる歴史的風致

(1) はじめに

津野地区は、水源地である英彦山から北へ流れている今川流域に形成された農村集落^{たかぎじんじや}が広がる地区である。英彦山に近い方から上津野、下津野の字に分かれており、各々に高木神社が鎮座している。

津野神楽は、高木神社において、毎年5月3～4日の二日間にわたって行われる神幸祭の際に、万念願を祈年して、奉納される民俗芸能である。

(2) 歴史的風致を形成する建造物

津野神楽にかかわり歴史的風致を構成する建造物は、下表のものである。

表 歴史的風致を構成する建造物（他の歴史的風致において概要を記載）

	建造物名	掲載ページ
1	上津野高木神社	2-10
2	下津野高木神社	2-11

(3) 歴史的風致を形成する活動

1) 津野神楽^{つのかぐら}（重要無形民俗文化財「豊前神楽」^{ぶぜんかぐら}の一つ）

福岡県文化財調査研究委員会編『豊前神楽調査報告書^{ぶぜんかぐらうさほうこくしよ}』（平成24年（2012））によると大正3年（1914）に創始したといい、それ以前はみやこ町伊良原や鑑畑^{あがみはた}から神楽を雇っていた。更に大正5年（1916）頃伊良原から移り住んだ加来松平が指導したという。その後、昭和16年（1941）みやこ町上高屋^{かみたかや}から養子にきた長末稔^{ながすゑみのる}が指導して今日に至っている。以前は津野神幸の曳山とともに神楽が奉納されていたが、昭和40年（1965）の油木ダムの建設による人口減少により、神楽は一時期行われていなかったものの、郷土の芸能として残していこうと若い人たちが奮起して、昭和46年（1971）に保存会が発足した。現在は、津野神楽保存会の人たちによって行われ、10数名の座員をもって奉納されている。津野の神楽は、豊前一带に分布している岩戸神楽の系譜を引いている。平成29年（2017）に国の重要無形民俗文化財である豊前神楽に追加指定された。

神楽の準備は神幸祭の2ヶ月ほど前から行われ、上津野高木神社では毎夜神楽の練習をする。また、しめ縄や御幣、神楽綱などの道具も座員によって準備される。神楽の奉納は、津野地区の神幸祭において行われており、1日目の上津野高木神社から御旅所へのお下りの折に御旅所において、2日目の下津野高木神社から御旅所へのお下りの折に御旅所において奉納されている。

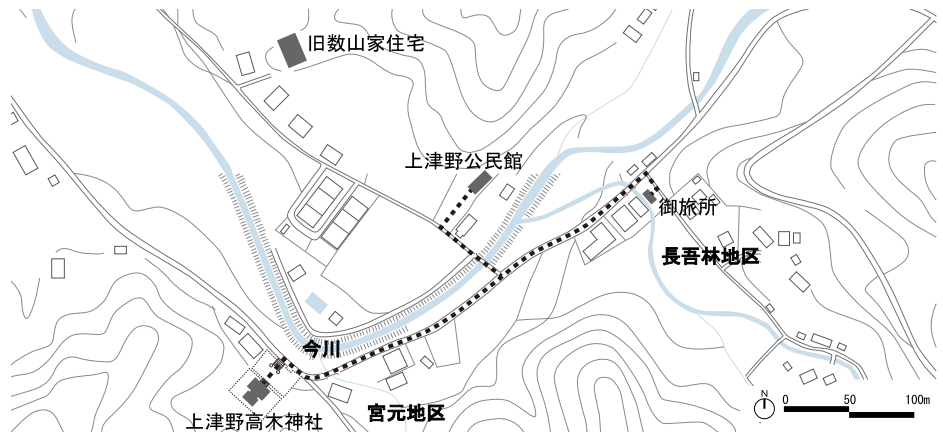


図 上津野神幸祭のルート

上津野高木神社では、御旅所の旅殿前の広場に齋庭を作り、その場所で奉納される。天候等の影響により、上津野高木神社の拝殿において奉納されることもある。

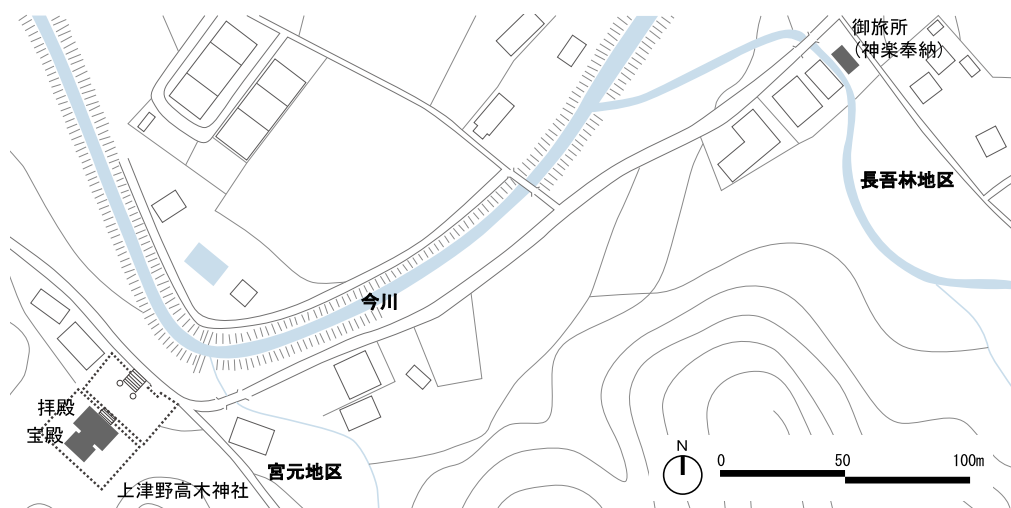


図 上津野高木神社境内、御旅所の配置

旅殿に安置された神輿の正面には、天岩戸の造形を置き、向かってその右手に楽人が座る。楽器は笛・太鼓・銅拍子である。

午後8時神官の祭典の後、神楽方により大祓詩が奏上され神楽が始まる。

まず、烏帽子に色とりどりの狩衣を纏った神楽方が神降ろしをする「米まき」、「折居」、「御福」を舞う。



米まき



折居

「メ切」では錦の狩衣を着けた幣役（法者）と鬼神が国土のやり取りをし、鬼神を追い出した国土に千早を着てシャグマ（毛頭）を着けた火神、水神、木神、金神の4神が四季を分けたことで、土神と問答となる。これに対し、神の主に嗜まれる五行の舞の「地割り」を舞う。



メ切



地割り

四方神に豊穰を祈る「^{ぼん}盆」の舞、再び鬼神と幣役が国土のやり取りをする「^{さん き}三の切り」、
 厄を切る「^{さんぼんつるぎ}三本剣」の舞、綱持ちと神の主で鬼神を追い払う「^{あみ み さき}綱御先」、邪を祓う「^{ゆみ か ぐら}弓神楽」、
 浄めの「^{はな か ぐら}花神楽」が舞われる。



盆



綱御先

演目終盤に最高潮になると、^{おもいかねのみこと}思兼命が天岩戸を開ける算段をし、^{あめのうす めのみこと}天鈿女命が舞い、^{た ちから}手力
^{おのみこと}男命が岩戸を開け、金幣（天照大神）を外に出す「^{いわ と}岩戸」が行われる。夜神楽として12時
 過ぎまで舞われている。



岩戸（天鈿女命）



岩戸（岩戸開闢）

翌日の2日目、下津野高木神社では拝殿から御旅所まで神輿がお下りになると、輪番制によりきめられた4地区のうち1地区を練り歩く。その後、午後5時頃に神輿、子供神輿が御旅所に還御すると、神前祭が行われ、7時頃から御旅所において昨日と同様の演目で神楽が奉納される。

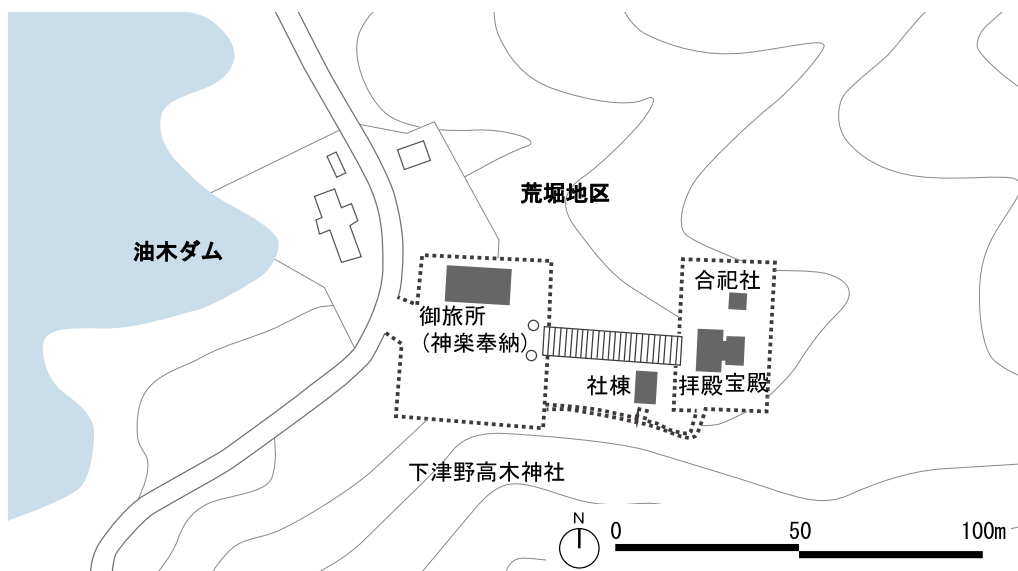


図 下津野高木神社境内、御旅所の配置

(4) まとめ

津野地区の神楽は、山を越え、人々の神々に対する崇敬と畏敬から伝授された芸能である。この神楽は、江戸時代より受け継がれる高木神社の御旅所の内部で奉納され、色鮮やかな衣装や飾り付けにより、厳かな雰囲気の中にも華やかさが入り混じる。神楽の伝承者である故人の長末氏は、地元では「師匠」と呼ばれ、長末氏は神楽会員を「子供」と呼んでいた。時が流れた今もなお、「子供」たちにより伝承される神楽が息づいており、歴史的風致が形成されている。

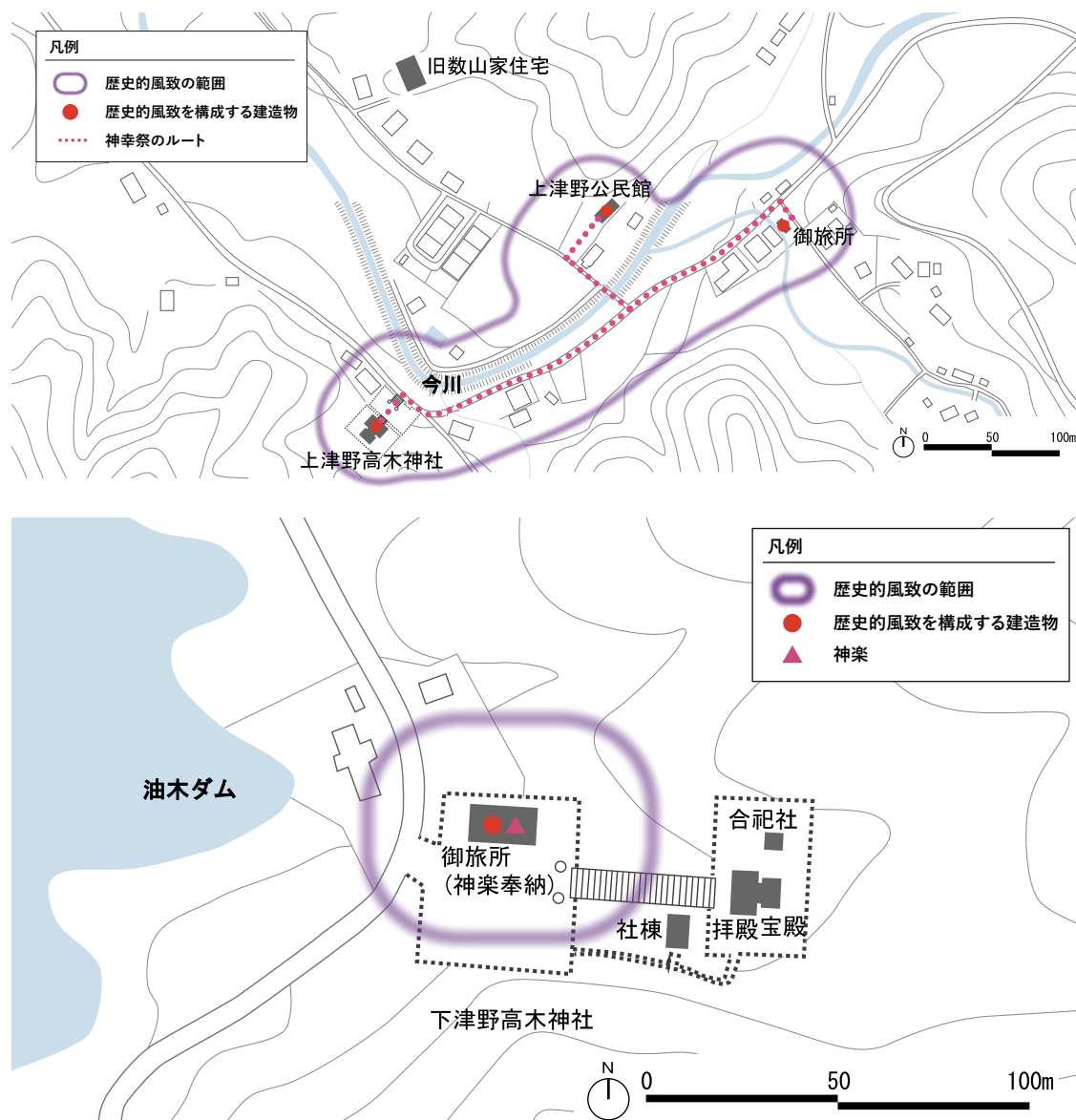


図 津野神楽にみる歴史的風致の範囲
(上段：上津野、下段：下津野)

3-2. 落合獅子楽にみる歴史的風致

(1) はじめに

落合地区は、水源地である英彦山から北西へ流れている彦山川流域に形成された農村集落が広がる地区である。英彦山に近い方から上落合、下落合の字に分かれており、上落合の太祖神社境内には須佐神社、下落合の高木神社境内には同名の須佐神社が鎮座している。

落合獅子楽では、須佐神社において、毎年5月上旬に行われる神幸祭の際に、豊穰と泰平を祈年して獅子舞と楽打ちが神社境内と御旅所で奉納されている。

(2) 歴史的風致を形成する建造物

1) 太祖神社

神社記録によると、太祖神社の創建は寛永元年(1642)とされ、江戸時代は妙見社と称していたが、明治4年(1871)太祖神社と改称した。元禄17年(1704)に落合が上下に分村したとき、英彦山三座(伊弉諾尊、伊弉冉尊、天忍穗耳尊)を勧請し、上落合村の産土神となった。11月下旬には、地域の方々に組織される宮座により、江戸時代から続く酉祭りが行われている。

宝殿は石積高殿となっており、桁行10尺、梁間9尺、三間社流造、銅板葺、向拝4尺の建物である。

両妻に下龍の妻飾などの江戸期彫物装飾が施されている。拝殿は桁行柱間8尺6間、梁間8尺2間、入母屋造、瓦葺、壁吹抜であり、宝殿と拝殿は2間規模の幣殿で繋いでいる。

拝殿には江戸時代の天井絵が残されている。由緒額によると、文化10年(1813)の建立、昭和31年(1956)に社殿の大改修が示されている。



太祖神社



図 太祖神社境内の配置



太祖神社宝殿・幣殿

2) 下落合高木神社

下落合高木神社は、英彦山四門の第一西口にあたり英彦山参詣の拠点であった。社伝によると、弘仁13年(822)に英彦山開基四世羅運上人が創建したと伝えられている。現行建物は拝殿・幣殿ともに昭和26年(1951)に改修が行われている。『添田町誌』(昭和34年(1959))の古写真から往時の姿を伺うことができる。

宝殿は桁行 10 尺、梁間 8 尺、三間社流造、柿葺
 覆屋、向拝 4 尺の建物で、両妻に麒麟妻飾、虹梁
 にも墓股、木鼻などの江戸時代装飾が随所に施さ
 れている。拝殿は柱間 10 尺、桁行 3 間、梁間 3 間、
 入母屋造、瓦葺、吹抜の建物で、宝殿、拝殿は 2
 間規模の幣殿で繋いでいる。英彦山の末社大行
 社であり、11 月下旬に霜月祭りが宮座として行
 われている。



下落合高木神社



図 下落合高木神社境内の配置



高木神社妻飾りの意匠

(3) 歴史的風致を形成する活動

1) 落合獅子楽

『郷土史誌そえだ 第 13 号』(昭和 63 年(1988))によると、太祖神社で奉納される獅子
 楽は、旧嘉穂郡筑穂町に鎮座する大分八幡宮で奉納されており、県指定無形民俗文化財となっ
 ている「大分の獅子舞」を伝授したとされている。この大分八幡宮の獅子舞は、京都石清水
 八幡宮より習得して享保 9 年(1724)に奉納したのが始まりで、筑豊地区各地の楽の源流と
 されている。本須佐神社の獅子舞もこの大分八幡宮より習得し、享保年間中(1716～1735)
 には成立したとされる。

一方、下落合高木神社で奉納される獅子楽は、『添
 田町史』(平成 4 年(1992))によると、幕末の頃に
 現在の川崎町の木城から学んで現在に伝わっているとされ、木城も上落合獅子楽と同様に旧嘉穂郡筑穂
 町大分から学んだとされている。そのため、落合で
 奉納されている二つの獅子楽は、その源流において
 同じと考えられる。古写真(昭和 47 年(1972))か
 ら往時の姿を伺うことができる。現在は、昭和 50
 年(1975)頃に、高木神社獅子楽保存会が出来て、
 会長は公民館長が兼ねており、楽打ちと獅子舞には
 それぞれ、経験者が指導に当たっている。



下落合の獅子楽の様子(昭和 47 年)

上落合獅子樂は神輿^{みこしはつれん}発輦^{だし}にあたり社殿の前庭で1回、御旅所に着座になって2回目の奉納を行う。この御幸に神輿と山車が同行し、氏子はその後に従いお供をする。翌日発輦神事後に3回目の獅子舞が奉納され、神輿還御の折、最後の獅子樂を奉納して神幸祭は終了する。

獅子樂は、集落を6地区に分割し、その組が祭座元（山元）として、毎年輪番で氏子青年が獅子舞、子供が大太鼓叩きを、奏曲の篠竹笛にあわせて舞う。演舞は、神社での祭典の後、神輿に神移しが終わってから始まる。まず、男女の10数人の小学生が社殿に向かって2列に並ぶ。その衣装は、白衣に小倉藩主小笠原氏^{さんがいびし}三階菱の家紋が入った黒の胸当てをつけ、頭にはシャグマに黒の刺しゅうが入った鉢巻きを巻き、黒の手甲を着け、黒の脚絆を履く。青か赤のたすきをして、背中には、黄・赤・緑・白の御幣を掲げる。



お上り御旅所発輦前に舞われる獅子舞



お上り御旅所発輦前の楽打ち

獅子樂は子供らの楽打ちから始まる。2列に並んだ子供たちの前に1個ずつ太鼓が置いてあり、先頭の者が太鼓を叩き、後ろの者は、先頭の者にあわせて太鼓を打つ所作をする。先頭は左の太鼓の者が最後尾に移動し、右の太鼓の者が左の太鼓に移動し、後の楽者が叩き始め、順次変わりながら樂を打つ。各人が持っているバチの持ち手に房がついていて、これは成就の秋の彼岸花を表わし、頭のシャグマ（毛頭）はススキを表す。最初、頭上で2本のバチを交差させ、それをふり下ろす。その所作は、笛・小太鼓にあわせて行われる。

一方、獅子舞は、集落の青年によって舞われ、10人ばかりの獅子方がいる。その衣装は、白の着物に、紺色唐草模様の袴をはいている。獅子は、雌雄一対で、雌獅子が紺色布の胴で、雄獅子が茶色布の胴である。

獅子舞の演技は、太鼓打ちが始まるとともに舞い始め、三番までである。舞う場所は、太鼓打ちをする子供たちの後ろである。一番はイリ、二番はナカ、三番をノリという。イリは、赤い獅子舞の雄獅子を左にして二頭が並び、頭を左右にふって舞い始め、向かい合ったり並んだりして、ナカになり獅子方が交代する。続けて舞うが、このときゴザを敷いて雌獅子がしゃがみ、雄獅子が近づきお互い頭をまわし

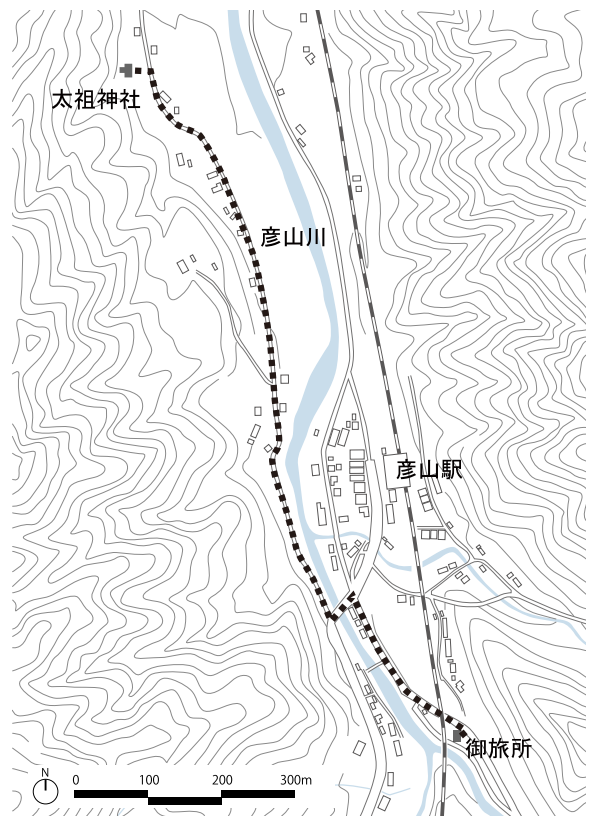


図 上落合の神幸祭のルート



太祖神社で奉納される楽打ち



お上り 太祖神社で奉納される獅子舞

ながら愛情の表現をする。ノリはイリのように舞うが、しゃがんだり、向かいあったり動きが激しくなり、最初並んだように雄獅子を左にして終わる。すべての所要時間は約10分である。



お上り御旅所での発輦神事

この獅子舞は、人の愛情をあらわしているものであり、イリは男女が出会うところ、ナカは両者が親密になったところ、ノリは子供をつくって人々が繁栄することを意味しているという。

下落合獅子楽も同様に神輿発輦にあたり社殿の前庭で1回、御旅所に着座になって2回目の奉納を行う。翌日発輦神事後に3回目の獅子舞が奉納され、神輿還御の折、最後の獅子楽を奉納して神幸祭は終了する。この祭りを運営する祇園組は、下落合氏子を地区別に5組に分け、その年の当番を山元という。山元がのぼり立てから神社の清掃までを引き受ける。次年の山元を受け取りといい、祭りの引継ぎを行う。

獅子楽は6名の楽打ちと獅子舞が平行して行われる。楽打ちの衣装は、白装束に着物を着て、五三の桐の紋をつけた黒の胸当てをつけ、頭には鉢巻きをしてシャグマを被り、青裁着袴に白足袋、黄色い布のたすきをかけて御幣を背中になさす。獅子舞は、雌獅子は黒色の頭に紺色系布の胴をつけ、雄獅子は赤色の頭に同色系の布の胴をつける。中にそれぞれ2人ずつ入り、獅子方の衣装は雌雄とも同じである。

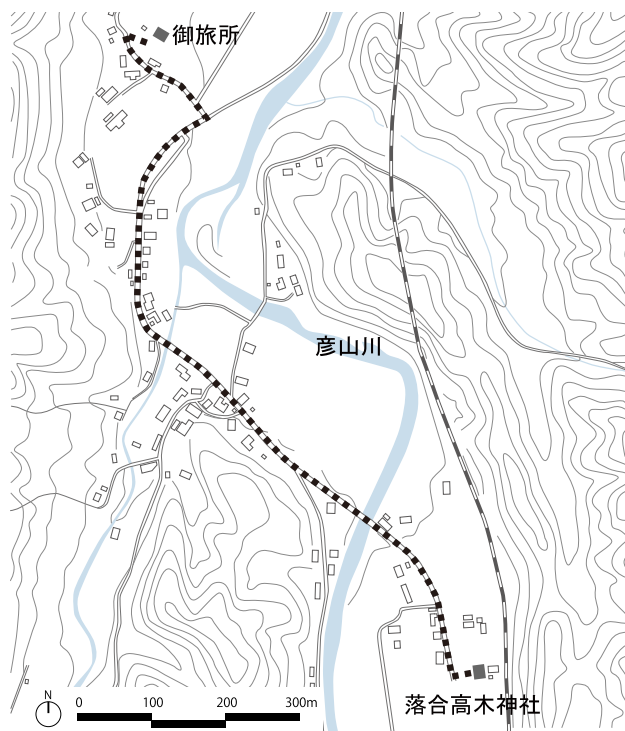


図 下落合の神幸祭のルート



お上り高木神社での着座神事



お上り高木神社で奉納される楽打ち

獅子楽は、発輦神事が終わって御神体が神輿に移されてから始まる。楽打ちは6人が2列に並び、先頭の者が房のついたバチを頭の上で交差して太鼓をたたき、他の者も同様の所作をする。この所作を繰り返して続けるが、終わり近くになると6人そろって左右に動き飛びあがる。

獅子舞は、楽打ちの列の後ろに位置して舞う。演目はイリとノリの二段階で、舞は、雄獅子を左にして始まり、演目がかわるときに獅子方は入れかわる。演舞の流れは、上落合と同じ系列といえる。



お上り高木神社での獅子舞



無病息災で行われる獅噛み

(4) まとめ

落合地区の伝統行事として、旧英彦山神領の高木神社や太祖神社を中心に神々へ豊穰と泰平を祈願する獅子楽は毎年奉納されている。神社境内において奉納される子供楽打ちと獅子舞の獅子楽が始まると、三々五々連れ立って多くの人が参集する。普段は静かな山麓農村に、子供たちの楽打ちによる威勢の良い太鼓や笛の音がよく響き、若衆が舞う荒々しい獅子舞への歓声が上がり、静寂を掻き消してゆく。山郷の鎮守の森に鎮座する太祖神社や高木神社の神々に里人たちが楽の音に情念を込めて祈りを捧げる情景が受け継がれ、歴史的風致が形成されている。

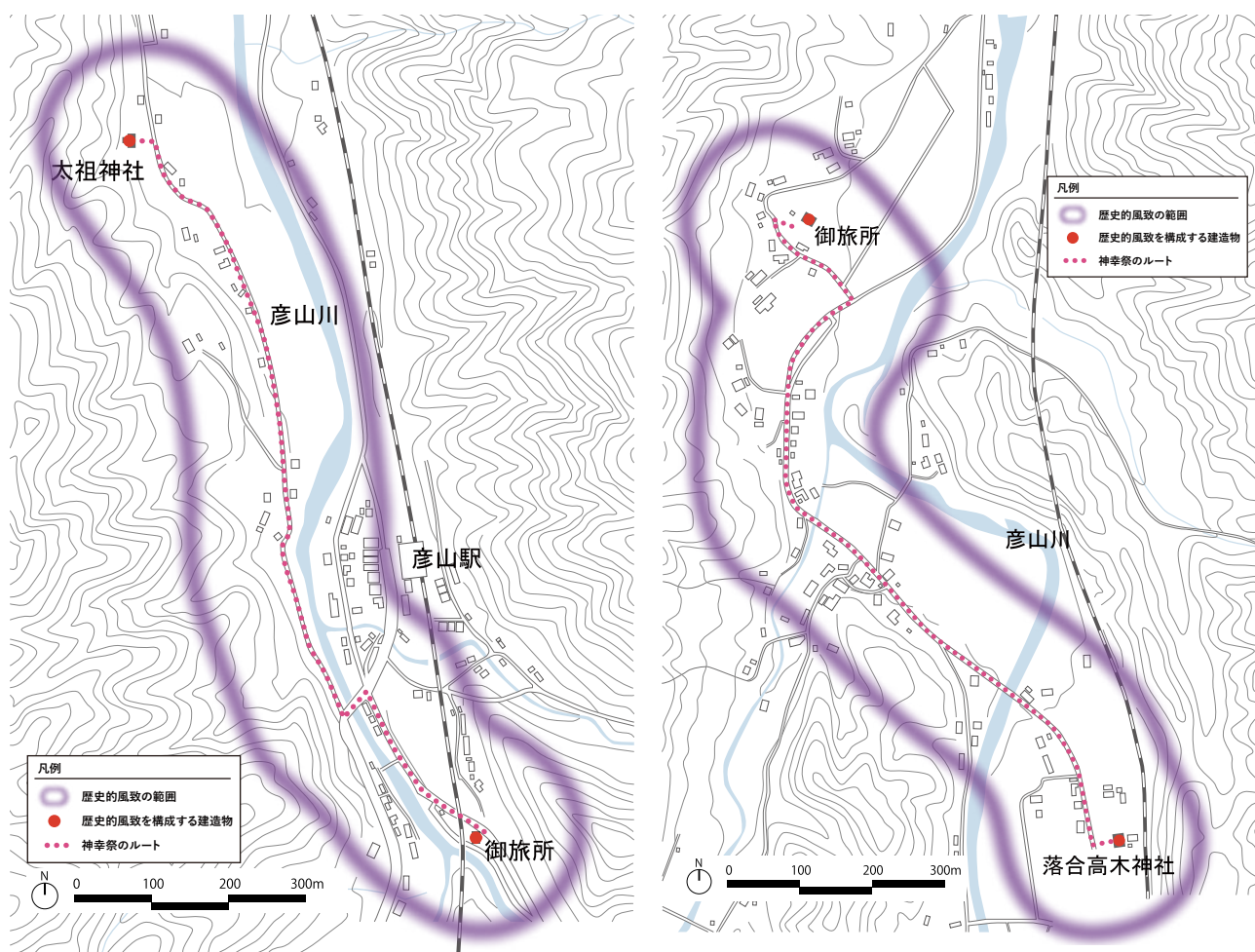


図 落合獅子楽にみる歴史的風致の範囲
(左：上落合、右：下落合)

3-3. ^{の だ し し が く}野田獅子楽にみる歴史的風致

野田地区は、水源地である英彦山から北西へ流れている彦山川流域に形成された農村集落が広がる地区である。落合より下流側に位置し、^{か も じんじゃ}加茂神社が鎮座している。

野田獅子楽は加茂神社において、毎年5月中旬の二日間にわたって行われる神幸祭の際に五穀豊穡を祈願し、神徳を感謝し、神霊を奉る氏子の奉仕で行われる。

(2) 歴史的風致を形成する建造物

1) ^{か も じんじゃ}加茂神社

加茂神社は野田村の地主神をまつる神社として建立され、創建は^{けいこうてんのう}景行天皇の御宇とされる。古来「^{こうぎょうしゃ}光行社」とも称せられ、その文字が刻まれた石製扁額^{へんがく}が残っている。現行建物は大正11年(1922)に改築された。宝殿は檜無垢一間社流造、銅板葺の建物で、木鼻、墓股など随所に江戸期の造形が残る。この宝殿に併設して2間間口の幣殿がある。拝殿は桁行6間、梁間3間、入母屋造、銅板葺で、江戸後期の天井絵が施され、正面向拝にも獅子墓股、麒麟木鼻など江戸期の彫刻が残る建築物である。『添田町誌』(昭和34年(1959))の古写真から往時の姿を伺うことができる。



加茂神社



図 加茂神社境内

2) ^{の だ き ふねじんじゃ}野田貴船神社

野田貴船神社は、加茂神社より先に祀られた野田本村の産土神で奈良時代の創建という。加茂神社から隔年で神輿のお下りが行われる。現行建物は桁行5間、梁間2間の瓦葺拝殿に右手2間奥のところに覆屋で守られた柱間4尺程の小振りな宝殿を配する。『添田町誌』(昭和33年(1958))において存在していた記述があり、文化4年(1807)に再建されたことが示されている。平成7年(1995)に改修されている。



野田貴船神社

(3) 歴史的風致を形成する活動

1) 野田獅子楽

『添田町史』(平成4年(1992))によると、^{こうかくてんのう}光格天皇の文化元年(1804)に日向国^{ひゅうが}から伝来した獅子楽であるとされる。加茂神社は、古来日向の宮(現、日向大神宮^{ひゅうがだいじんぐう})と神縁浅からぬものであり、同宮から舞楽の師を招いて習得し、相伝えて今日に至るとされる。この起源

の記録については、幕末期に野田にあった小倉藩火薬庫の爆発の際に、村内大火災で焼失したとのことであり、記録は残されていない。しかし、田川市猪膝にも同型の獅子楽があり、野田に伝えたと言われており、野田の古老たちも猪膝からのものと伝え聞いているとされる。

加茂神社記録には明治期からの獅子楽の指導者名が記されており、明治期（森本九平、森永長九郎、堀洋平、出口喜平、中村庄四郎、森山熊太郎、森本常平）、大正期（森本準一郎、中富吉蔵、山本勝治、中村平次、広沢牛郎、新野豊治）、昭和期（藤本愛次郎、崎山東一郎、北屋敷武則、白石嘉亀、中村潔、原和久、八島豊彦、高辻亀彦）と代々奏楽、獅子舞が大切に伝えられてきたことが分かる。

また、昭和44年（1969）に撮影された古写真から往時の姿を伺うことができる。

加茂神社の神幸祭は、加茂神社で神輿への神移しの儀式が行われた後に、1日目に神輿のお下り、2日目にお上りがある。お下りは、野田地内の見地の貴船神社と御旅所が一年交代で行っており、加茂神社を神輿が発輦すると鳥居から参道を通り加茂橋を渡って野田本村から見地へと下りである貴船神社に向かう。貴船神社へ向かう際は獅子が先導し、「新馬場」の舞を奉納し、神輿が着座する。御旅所に下る年は、鳥居から参道を通り堤防沿いを御旅所へと向かう。同様に御旅所に入る前に新馬場の舞が奉納され、神輿が着座する。

獅子楽の練習は、神幸祭当日の1週間前に加茂神社にて4日間、貴船神社にて2日間、毎日午後7時から11時頃まで練習を行い、最終日は朝より加茂神社において総仕上げの練習を行っている。前日、獅子は楽宿に入り、楽宿で獅子楽役の接待座がある。当日は楽宿から獅子が出立し、楽宿前で獅子舞が奉納される。

獅子舞は、雌雄の一对で舞い、それぞれ頭と尾に1人をあて、合計4人で舞う。獅子の頭は、雄は赤、

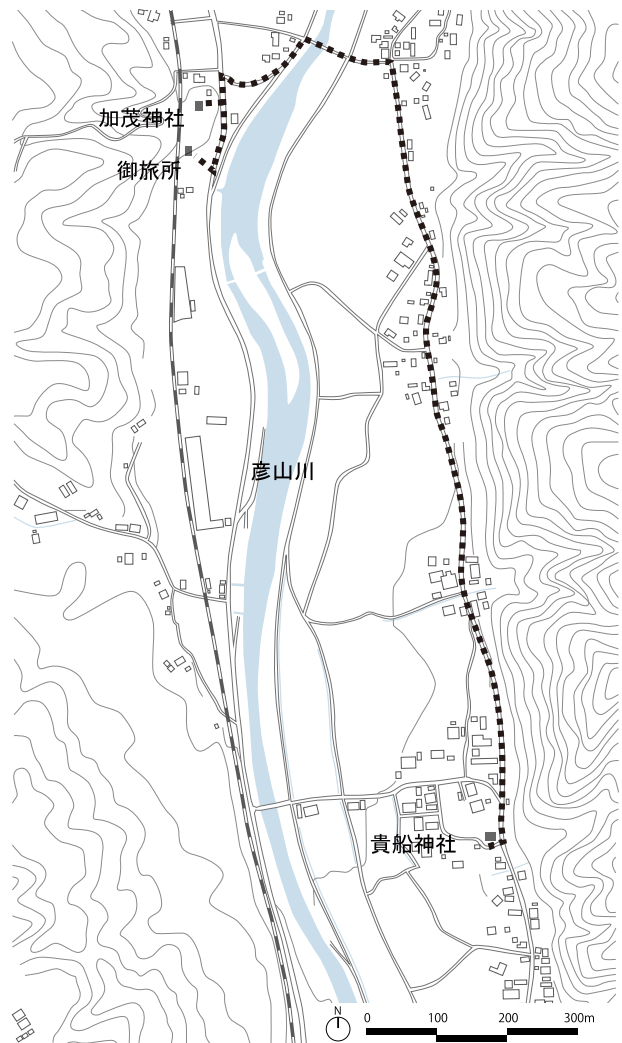


図 野田の神幸祭のルート



往時の様子（昭和44年（1969））



獅子楽練習風景

雌は黒塗りであり、現在使われている雌獅子頭は明治23年(1890)に氏子の前田^{まえだ}為吉^{ためきち}氏の寄進に係るものの作者は不明である。雄獅子頭も同時寄進のものと思われるが、中途破損して修復している。獅子の胴衣は、雄雌とも紺色の布を使い、獅子方の衣装も同じである。お下りでは加茂神社で神輿遷座祭が行われた後に、獅子舞の演目である「護壇」と「舞音和^{まねにわ}」の舞が行われる。護壇の舞は、神輿出発に当たり悪魔退散、道中安穩を祈念する舞のことである。その所作は、雄獅子を左にして2頭が横に並び、雄獅子を前に雌獅子が続いて時計の針とは逆方向に円形に回る。途中、2頭横に並んで正面に向かって舞ながら前進する。その動きは激しい。次に雌獅子を先にして円形に進む。約3分ほどの演舞である。



楽宿に安置される獅子頭

舞音和の舞は、神慮を慰め奉る意味の舞のことで、最も代表的な舞である。雄雌一對の獅子が躍動感に満ちて荒れ狂う様を表現する勇壮な舞で、別名狂い獅子と呼ばれ、略してクリーとも呼ばれている。その所作は、2頭の獅子が並んで舞い始め、向かい合ったり並んだりしながら、後段では雌獅子がしゃがんだところに雄獅子が頭を近づけて回す所作もある。前・後段あわせて時間は5分程度である。



護壇の舞



舞音和の舞

加茂神社から神輿のお下りをして、神輿が貴船神社又は御旅所に入る際に、「新馬場」の舞が行われる。新馬場の舞は、神域の平穏や悪魔退散を祈念する舞のことである。その所作は、神輿の前方に雌獅子が並んで、頭を回しながらゆっくりとしたものである。



新馬場入りの舞

お上りでは御旅所から加茂神社に入る際に、「馬場入り」の舞が行われる。馬場入りの舞は、還御に臨み神域安穩悪魔退散を祈念する舞である。その所作は、新馬場の舞と同様である。

お上りで神輿が加茂神社に着いて、祭典の後に、神輿から御神体の神移しが行われる際に、神庭において「神殿移し^{しんでんうつ}」の舞が行われる。その所作は、雌雄の獅子が並んで舞い、2回すりこむ。激しい所作はなく、時間は2分程度である。



馬場入りの舞（昭和 50 年（1975））



神殿移しの舞

楽打ちは、氏子中の幼少年たちが演ずるものである。その衣装は、緑色の模様が全体に入ったひざまでの長さの長袖の着物と同じ模様の袴を着用し、黒地に三階菱の紋が入った胸当てをつけ、黄色の帯で締める。この衣装について昔は、着物の生地や柄は自由で黒緇子に家紋を描いた胸当てをつけていたが、昭和 50 年（1975）頃からは獅子楽保存会で準備をしている。さらに頭には白色のシャグマを被り、手甲・脚絆に白足袋・草鞋ばきである。たすきは黄色で、背中に赤・白・紫などの幣下がりを着ける。バチをガクウチ棒とも呼び、長さは手の幅二つと言われ、赤色の房をつけている。

演舞の要領は、正面に大太鼓を一つ据え、子供が太鼓を叩くと、決まった所作を繰り返しながら、時計の針と逆方向に円形に進み、太鼓の所に帰ってくる。そこでまた、太鼓を叩き、前とは違った所作を繰り返して進む。その所作は 12 種類あり、小太鼓と笛、銅拍子が奏せられる。この所作は、稲作の種子まきから取入れまでの姿を表しており、バチはヒガンバナを、シャグマはススキの穂を示している。



加茂神社お上りでの楽打ち



楽打ち衣装
（昭和 50 年代（1975 ～ 1984））

(4) まとめ

野田獅子楽は五穀豊穡への神徳に感謝し、神霊を慰め奉るために舞われる。幼少年たちが楽を打ち、その音に合わせて、若衆が雌雄一対で躍動歓喜に満ちて荒れ狂う獅子を舞う。獅子が一晩を過ごす楽宿では門出を祝って獅子楽が舞われる。楽を打つ子供たちの目は生き生きと輝き、村を担っていく新しい息吹が感じられる。山里に軽やかな笛の音が響くと、村人が加茂神社に集まり楽の子供たちに拍手を送る情景が受け継がれており、歴史的風致が形成されている。

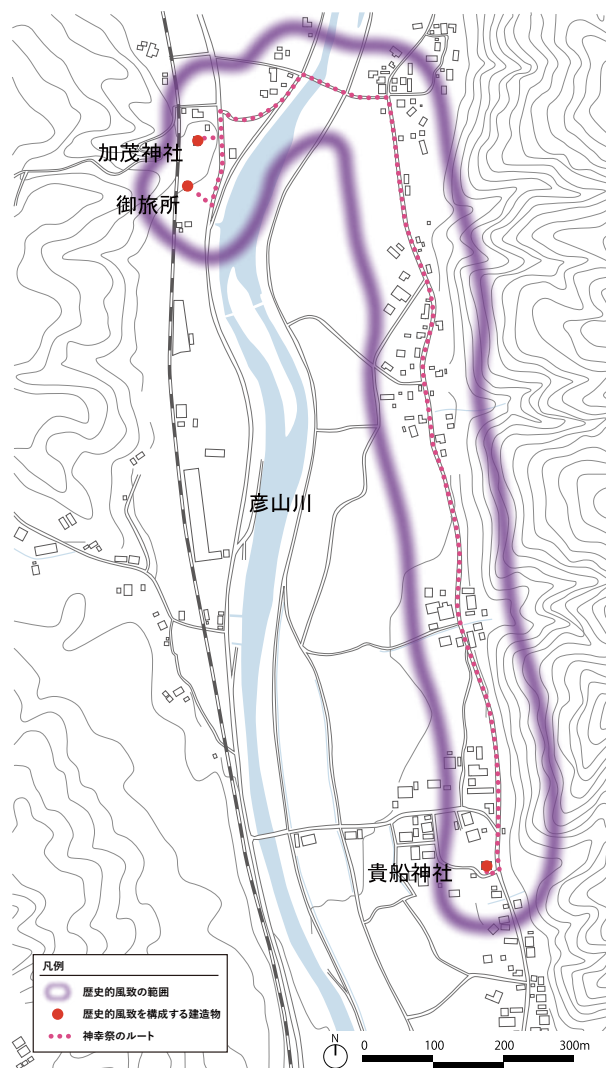


図 野田獅子楽にみる歴史的風致の範囲

Ⅲ. おわりに

春、英彦山水系の村々では春告げの祭として神幸祭が行われ、豊穰を祈るために神々と結ぶ神楽や獅子楽が奉納されてきた。山神への崇敬、畏敬を忘れず、英彦山水系の村々の若衆や子供たちの奉納する躍動みなぎる神楽や獅子楽は山里の特徴ある風情として地域に浸透している。山間に鳴る笛の音、太鼓の響きは山へと木霊し、今も続く山と里を結ぶ情景から、歴史的風致を感じることができる。

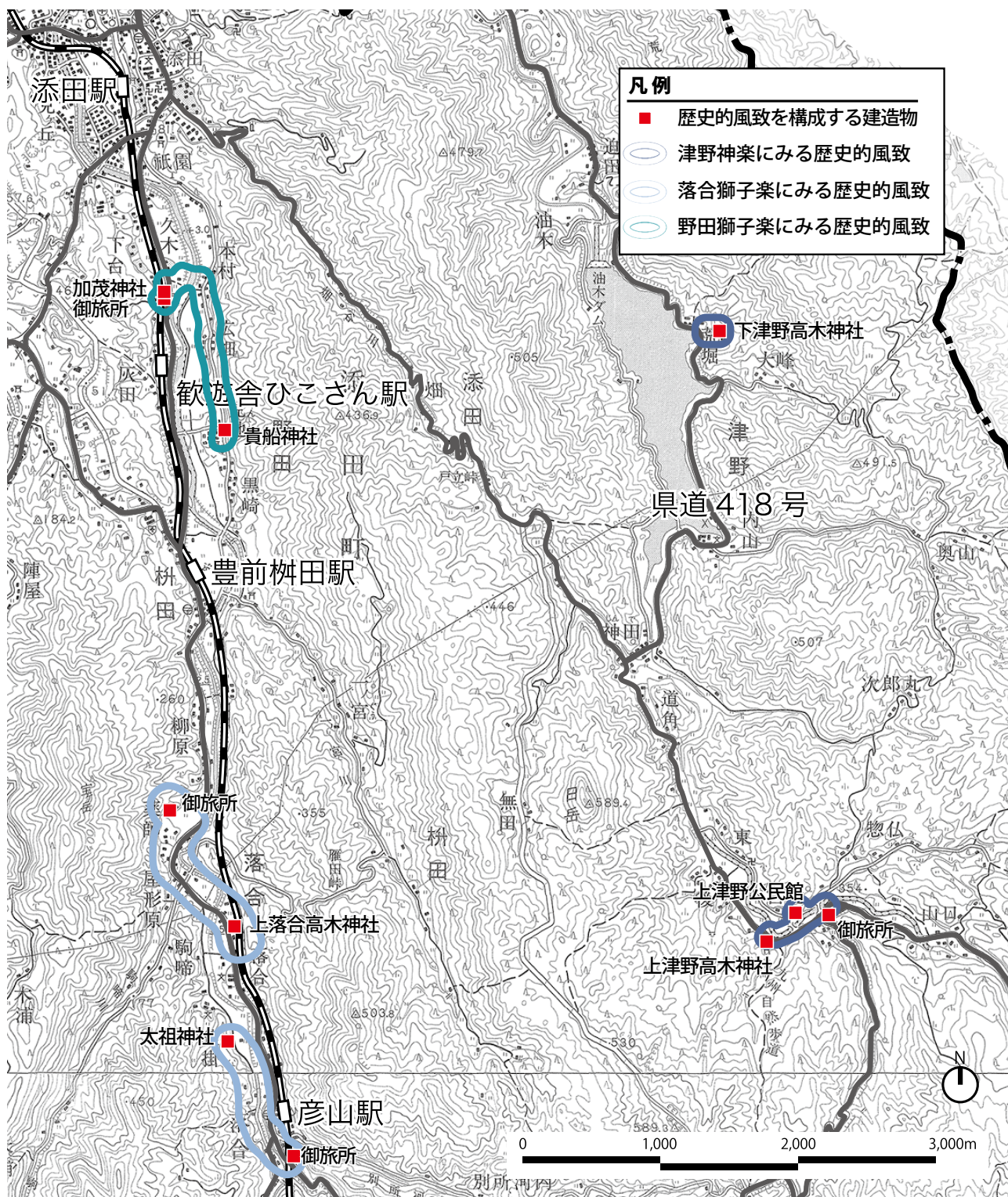


図 英彦山水系流域と民俗芸能にみる歴史的風致の範囲